



JASWHS 公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会

Japanese Association of Social Workers in Health Services

令和6年3月31日 第13巻(第4号)

発行：東京都新宿区住吉町8-20 四谷チンゴビル2F

災害支援チーム TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

もくじ

巻頭言

石巻市に通った13年間を振り返って

1. 3月11日を越え、これからへ
2. グループ活動の終わりを迎えて
3. 最後の石巻だより ～地元紙・石巻かほくの”愛の物語”によせて～
4. 最後に支援活動を振り返って
5. 石巻市での相談支援ケースのまとめに関わったこと
6. 10年を超えた石巻市での災害被災者支援の終りに
7. 災害支援チームからのお知らせ

編集後記(金子)

2024年3月31日

当協会は石巻市での被災者支援活動を終わります

ご愛読ありがとうございました

◇ 巻頭言

石巻市に通った 13 年を振り返って

石巻災害支援チーム 統括責任者 笹岡 真弓

石巻支援と銘打った活動も、2024 年 3 月末日をもって終焉する。私は統括責任者でありながら、果たしてその責を果たせていたのだろうか、自問自答する。否、という答えが自分の中に返ってくる。

2011 年当時は無我夢中だった。多くの仲間とともに発災から数年、思いつく限りの活動を行った。石巻に移り住み、数年にわたり次々と支援のバトンをつないでいった「当協会の職員としての MSW」の方々には感謝の言葉だけでは到底足りない思いがある。彼らの実践の尊さは言うまでもないことだが、私はこの事業に最後まで真摯に向き合ったのだろうか、目的について、目標について、その都度ごとに真剣に議論を重ねただろうか、理事会とのパイプ役をまっとうに果たせただろうか、自責の念が沸き起こってくる。

石巻市で知り合った方々への思いを胸に、年月を振り返ると、特に印象に残る、まだ初期に自分もソーシャルワーカーとして、訪問した人の顔が目には浮かんでくる。

今回本を書くにあたって、記録を読む作業を西田さん、武山さんに行った。このお二人に比して私は膨大な事例から思い起こす方が少なく、身の縮む思いがした。

それでも、13 年間、医療ソーシャルワーカーのできることに、できたこと、そしてその可能性について考える機会を与えていただいた石巻市の方々の好意を思うとき、この灯を消してはならないと新たな力も感じている。

大災害が起こる周期は、年々短くなってきている。「明日は我が身」だと思いながら、つい日常に流されてしまうが、改めてこの 3 月を節目に、これからの災害時におけるソーシャルワークを考えていきたい。

1 月 28 日のフォーラムでは、参加した多くの理事が感銘をうけたとのことだった。メールで感謝の言葉を頂くと、上述した自責の念にかられる。

石巻市から珠洲市へと、支援のバトンをつなぐことで、石巻市からの恩に報いたいと思う。そして確実に石巻支援と珠洲市支援の道はつながった。全国のソーシャルワーカーの熱い思いが、これからも「見える形」で示すこともまた、協会の大きな使命であることを確信した。ありがとうございました。

1. 3 月 11 日を越え、これからへ

石巻災害支援チーム 現地責任者 福井 康江

東日本大震災での被害状況（2024 年 3 月時点）～河北新報、石巻かほくより～

宮城県	直接死者 (9,544 人)	行方不明者 (1,213 人)	関連死者 (932 人)
*石巻市	”(3,277 人)	”(417 人)	”(276 人)
岩手県	”(4,675 人)	”(1,107 人)	”(471 人)
福島県	”(1,614 人)	”(196 人)	”(2,324 人)

〔石巻市の住宅被害：住宅全壊（20,044 軒）住宅半壊（13,050 軒）

〔仮設住宅の入居状況〕

宮城県 みなし仮設住宅（県内 8 戸 12 人）

福島県 プレハブ仮設住宅（3 戸 4 人）

みなし仮設住宅（県内 364 戸 550 人、県外 252 戸 468 人）

私が東北の地で 3 月 11 日を迎えるのは、今年で 12 回目となりました。

今年のこの日に「河北新報」と「石巻かほく」が紙面の 1 面に添えた言葉は、それぞれ、“東北も 能登も 思い寄せ”、“思い空を越えて～古里、能登、あの人へ～”との言葉であり、両紙とも“能登”への思いを添えていました。そして、「石巻かほく」では「震災からの歩みでわれわれが感じてきた希望や葛藤、後悔もきつと、能登の復興に生かせる。」との言葉を記しています。

東北での支援活動が続ける中で、私自身も常に葛藤や後悔を抱えていたように思います。被災地や被災者と呼ばれ続けることを少しでも早く解消したい、生活再建を早く進めたいと考え、いわゆる恒久的な住居とされた復興住宅に入居したことで、やっと“普通の生活、普通の人”に戻り、生活再建となるということの一つの考えとしていました。しかし、入居後の生活に慣れるのに苦勞をされていたり、孤立を深めてしまったといった方々とかかわる中で、「被災前の生活に戻りたい。」との言葉を聞き、以前の暮らしについて鮮明に話すのを聞いた時には、被災をするということはどういうことなのか、被災者の支援とはどういうものであるのか、復興や生活再建とはどういった状況を示すものなのか、あらためて悩みを抱えることになりました。事業の終了が見える時期になっても、答えのない問いを考え続ける日々を送っていました。

年明けには北陸・能登半島大震災が起き、時間が逆戻りをした思いに駆られていましたが、1 月末のフォーラムでグループワークに参加していただいた方々から、被災者支援はどこかで終わるものではないこと、そして支援はつながってゆくものであるとの言葉を聞き、腑に落ちると共にとても心強くそして石巻での被災者支援事業をここまで継続してきたことを素直に受け入れることが出来た瞬間でした。

今月の 3 月 11 日の石巻では、午後 2 時 40 分に追悼の黙とうを行った後、大勢の方々が午後 4 時 10 分に能登地方に向かって黙とうを行いました。また、慰霊の大花火の一つが、灯籠の一角が、北陸・能登震災の被災者の方々へ手向けられました。市民の方々からは、「今どんな思いでいるかわかるから。」「一人じゃないと伝えたいから。」との言葉が次々に溢れていました。こうした住民の方々の言葉を聞き、震災後の歳月を共に過ごしてこれたことを誇りに思いながら、「事業を終えていいのだ」と初めて受け入れることが出来ました。

また併せて、震災の恐ろしさや惨さ、その中での見つけた夢や希望、そして復興に形があるのであれば、それは皆その方々の中にあり、色あせることも、形を変えることもあると思いますが、決して無くなることもないのだと改めて実感することにもなりました。

思えば、「今何ができるのか。しなければならぬか。」ただそれだけを考えながら進んできたように思います。そうさせてもらえたこと、そうできたことは、何よりもこの事業をつないできてくれた皆さんやこの場に住民の皆さんがいてくださったからに他なりません。

最後になってしまいましたが、この事業を、私達を、支えてくださいましたたくさんの皆さまへ心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。そして、またお会いする時まで、どうかお元気でいてくださることを願っています。



2. グループ活動の終わりを迎えて



石巻災害支援チーム 現地担当 岩崎 隼生



長きにわたり続けられてきた高齢男性独居のグループ活動(夢と希望の会)が3月の開催をもって最後を迎えました。

最後の会は石巻市ささえあいセンターの市民協働室を借り、石巻市社会福祉協議会地域福祉コーディネーターの方に社会福祉協議会の取り組み、活動について説明していただきました。何か困ったことがあった際の窓口や相談内容など丁寧に教えてもらい、メンバーの方々からも「こんな活動をしているのを初めて知った。何かあった時は相談します。」などの声が聞かれ、最後に社会福祉協議会とつながることができ、とても安心しました。

続いて平野さんに作成してもらった活動記録のDVDを皆で観賞しました。これまでの「花見、釣り、調理、ポッチャ、交流会、川開き祭り」などの写真が流れ、静かに思い出に浸りながら鑑賞することができました。場所を移して、お昼を摂りながら、これまでの活動の楽しかったことや思い出話に花を咲かせ、最後の時間を楽しみました。メンバーからは「本当に今までありがとうございました。」との言葉もいただき、無事にグループ活動を終えるができて良かったと思います。メンバー同士で連絡先交換を行い「グループ活動が無くなっても交流を続けていく」との話があり、会が無くなった後も交流が続いて行くと思うとこの日まで続けて来た甲斐があったと思いました。

これまでメンバーや職員など入れ替わりもありましたが、このグループ活動を続けることができたのは、メンバーの方達が毎回参加し続けてくれたことや、歴代の職員がこのグループを繋げ続けてきてくれたおかげだと思います。私自身もグループ活動の経験がなく、初めての活動で沢山学ぶことがあり、グループ活動がもたらす影響や必要性など感じることができました。今後、グループ活動をする機会や自ら作る機会があった際には今回の経験を活かしていきたいと思っています。

私が石巻市に来て 1 年 8 ヶ月月の短い期間でしたがソーシャルワーカーとしてこれまで経験したことのない多くのことを学び、勉強になった機会でもあり自分の中では大きく成長できた時間だったと思います。この経験を糧にさらに成長して、ソーシャルワーク支援に従事していきたいと思っています。



3. 最後の石巻だより ～地元紙・石巻かほくの”愛の物語”によせて～



石巻災害支援チーム 現地担当 高橋 としみ



最後の災害ニュースになりました。1 年半という条件で採用していただき、早かったような、短かったような。特にフォーラム開催のあたりからはあっという間に過ぎた感があります。私を採用していただき、本当にありがとうございました。多くの事を勉強させていただきました。私自身、恥ずかしいのですが、ソーシャルワークという仕事も初めて知りました。この震災で石巻にも少し浸透したのではないかと思います。

さて、表題の件にはあります。地元紙の石巻かほくでは『つつじ野』という人気のコラム欄があります。2 か月間、曜日担当で週一度紙面に載ります。実は私も以前二度程掲載された経験があります。昨年つつじ野から選んだコラムで、『愛の物語』と銘打って冊子が作られました。評判がよく、その後一般応募で愛の物語の特集を組みました。これがまた評判でした。先日、前半に応募した方から選ばれた 10 編のコラムを読む朗読会がありました。百人定員のところ満席でした。プロのアナウンサーが読むので作品の幅が広がり参加した方々に感動を呼び起こしました。小さなホールでしたが、特別な空間がたちこめてコラムを書かれた方との共感を得た雰囲気でした。震災の語り続けていらっしゃる竹下景子さんの朗読会に行った事がありますが、とても感動した記憶があります。共感することで悲しみや辛さを共有できるのだと思います。

なぜ、いま、『愛の物語』なのか。私の勝手な憶測ですが、東日本大震災は本当に大変なことでした。家族を亡くされた方、家が流された方はもちろんですが、この被災地の方すべてが被災者だと思います。いろいろな形で被災しています。そして今年の能登地方の震災、世界に目を向けると、自然災害は続いており相変わらず戦争は終わらず、痛ましい建物や人々を見るにつけ、心は傷ついていると思います。何かに癒されたい、あるいは癒

にぎわっていたといわれる繁華街も、どこでみんな呑んでいるのだろう？と不思議になるほど酔客は見かけない。最も最近では蛇田のほうに繁華街が移動しているとも聞かす。

私は顔を合わせ話をするうちに、もっとこの人を知りたいと思うと、呑み会に誘うことが多いのだが、石巻ではそれが思うように出来なかった。車通勤ときくと、呑みに行こうとは言えない。代行の費用は安くない。たった2年しかいなかったからこそ、私にとって、呑み会は石巻の人を理解するうえで必要だった。石巻を理解することはまだまだ志半ばである。

定期的に石巻を訪れることはできなくなるが、自発的に石巻駅に降り立つことはいくらでもできる。体力が続く限り年に数回、美味しい居酒屋さんに行きたい。

理解する、その人、その地域をより良くわかるには勿論時間も必要であるし、共に体験することも重要になる。その点で私は、石巻支援に赴き、石巻に滞在した20数名の職員に今でも詫び続けていることがある。特に非常勤になってその思いは強くなっている。

支援開始時から東京の石巻サポーターと石巻の責任者が定期的に会議を持ち、石巻の復興の状況を教えてもらい、職員が困っていることなど話し合っていた。それが、理事会(?)の都合とかで、2017年から開催されなくなった。石巻職員が困難に陥った出来事があった時に、話し合いの場がなくなったことがその原因の一つであると、その当時の理事に訴え、会議の場を早急に開催するべきだと主張したが、私の意見は取り上げてはもらえなかった。その後、ズームで会議ができるようになってやっと石巻職員と様々な相談ができるようになった。2022年非常勤となって資料を整理しながら、その当時の職員の記録を拝見し、復興途上の困難なケースに向き合いながら、石巻のソーシャルワーカーがどれほど辛い思いをしていたか、私は何も手伝えなかったと申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

被災地支援は直接支援も大切だが、後方で彼らをサポートすることはさらに重要だと最近、特に耳にする。私は、もう直接支援はできないが、支援に向かう人々のサポートを続けたいと思っている。すでに珠洲市の支援に入っているソーシャルワーカーたちを支援する仕組みを日本協会はどのように作っているのだろうか。私も末端で協力出来たらと思っている。

〇〇 〇〇

5. 石巻市での相談支援ケースのまとめに関わったこと

〇〇 〇〇

文京学院大学・日本医療ソーシャルワーカー協会 平野 裕司

〇〇 〇〇

東日本大震災から13年が経過した。そして、今年3月をもって(公社)日本医療ソーシャルワーカー協会の石巻市からの委託事業は終了する。

私が石巻に住んだ2020年度は復興期に入っており、復興住宅に入居する独居の人の支援依頼が多かったことを記憶している。

復興住宅での生活様式やルールに馴染めず、近隣住民との関係等に課題を抱えている人や加齢に伴うADLの低下により1人での生活が難しくなってきた人の支援が多かった。さらには新型コロナウイルスの影響である。私たちが訪問が制限される中での支援に苦労した。

また、私は協会員として『東日本大震災被災者への10年間のソーシャルワーク支援—公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会の相談支援1047ケースの実践報告』の執筆に関わらせていただいた。

一方で私は葛藤と辛さを抱えた。自身が被災者であり、過去のことを思い出すことが辛く、冷静に分析できなくなるということであった。それゆえに共同執筆者と口論になることもあった。

そんなある日、私が突然自分の被災体験を思い出し、その体験を秘めておくことができなくなったこともあった。そのことは私が震災後の様々な場面で絶対に話したくないと思ってきたことであった。

震災後数日経過した時、学生だった私が水くみや掃除など手伝っていた避難所の玄関に高齢者を乗せた軽トラックが止まり、知り合いの社会福祉士が次々と布団にくるまれた状態の高齢者を降ろしていったこと・・・

そして、私の祖母の死とその背景にあったこと・・・

前者は私が地元で出会った数少ない社会福祉士の1人との話である。震災以前親身になって相談にのってくれた人であった。あの日その光景を目の当たりにし私はショックであった。また、私の祖母は震災の前から疾患を抱えていて、震災後家族が多忙さもあり、その疾患に正面から向き合うことができず、結果、死を迎えることとなった。

そのような体験を通して私は被災者の生活再建においてソーシャルワークが求められ、また復旧のステージ毎にどのような支援が求められるのか整理する必要があると考えた。目の前のことに追われ助けることのできた命を助けることができなかった。

本の中で記載したが、発災以前は支援を必要としていなかった第3層（被災前には支援を必要とせず、被災で生活維持機能が崩壊、復旧・復元・生活維持が困難な人）該当者が、被災により潜在化していた生活課題が表出し、生活維持が困難となり支援が必要になる。第3層該当層は発災後、身体・健康（うつ病・PTSD）、意見表明・契約（復興住宅入居・引っ越し等の書類の記載内容を理解し、記入、手続きができない）等生活課題が表出し、要支援状態となっていた。中には、本人が生活課題を認識していない等の要因により、福祉サービスを利用するまでに時間を要していた。そのため、被災前後の生活状況の変化をアセスメントし、現在の生活課題や今後本人が抱える可能性のある生活課題を明らかにし、本人とともに生活再建支援を考える必要がある。

また、災害ではインフォーマルなソーシャルサポートネットワーク（家族・近隣住民・友人等）を喪失し、それまで予想もしていなかった生活のしにくさが出現する。特に、長く住み続けた地域とは全く違う場所で、見知らぬ人たちの中で生活する高齢独居の方にアウトリーチ型の支援を開始することが重要となることを明らかにした。このことは、長く支援をしなければ気づきえなかったことである。

改めて、被災した方々のご健康とご多幸をお祈りするとともに、これまで当協会の活動にご尽力くださった皆様へ感謝を申し上げる。

6. 10年を超えた石巻市での災害被災者支援の終わりに

『東日本大震災被災者への10年間のソーシャルワーク支援』の発刊に思うこと
そして 日赤で開催されたフォーラムについて

ソーシャルワーカー 武山 ゆかり

東日本大震災発災後 10 年を経て、日本医療ソーシャルワーカー協会が対応した被災者支援数が 1000 件を超えた。福祉避難所への支援を、石巻日本赤十字病院へ駆けつけたその日に依頼された。2011 年 4 月から現地常駐者を置き、避難者の面接支援を始めてから、すべてのケースに番号を記し、数日交代で支援に入る MSW が代わっても、必要なサポートが途切れることなく続くように、ファイリングがされ続けてきた。書類の申請支援や数人の家族をも含む複数の支援、保健師やボランティアと協働しての関りを持った方もあり、ファイルの数以上の住民のサポートの記録であった。私たちが当初は手探りで当たってきた支援は、災害ソーシャルワークの実際は、どのようなものであったか、共通して見えた問題や今後に伝え活かすべき問題が隠れてはいないか、検証をすべき時であることを 10 年という年月と、1047 件のケース記録が私たちに要求した。行く箱もの段ボールに詰め込んだファイルを開き、1 ケースずつ見直し、データに起こす項目を拾い、経過を読み、相談の種別に分け、終了の内容を分類し、どのようなソーシャルワークが行われたかを分析した。その作業は、支援の合間に現地事務所でも、また東京の協会本部にも作業場所を置き、支援に関わったチームメンバーが、久しぶりに作業に通った。時折出会う支援に関わった懐かしい名前に巡り合っては、自分の後に何人かの MSW が継続して関わり記録した経過に、つい手を取られて読み込み、石巻での日々や懐かしい景色に思いを馳せてしまったりもした。この膨大なケースの分析、ソーシャルワークの支援の意味、被災者支援に必要となる機能、そして今後への橋渡しとなる提言を、石巻市と全国の私たち MSW の仲間、災害支援を考える方たちに届けるスタートを、13 年目の近づくこの日「フォーラム」という形で石巻赤十字病院災害医療研修センター講堂をお借りして開催した。

フォーラムは、1 月 1 日午後に起こった能登半島地震での犠牲者への黙祷で開始した。奇しくも、開催直前、救急センター前に止まる何台かの車に数十人に渡るといふ石巻赤十字病院の医師、スタッフの幾つかのグループが、装備を抱え、慌ただしく乗り込んで出発していった。2011 年 3 月の野戦病院のようなざわめきを思い出させる一瞬であった。

「東日本大震災災害支援チーム石巻対策拠点」現地責任者・職員であった 8 人には「どのような時期に、どのような活動をしたか」「支援活動を経て得た経験や今、皆さんに伝えたいこと」を壇上で 1 人 7 分ほどで話すことが要請された。それぞれに、復興に向けた途上の違う問題が起こっていく変化するフェーズで、必死の思いで自身の限界を乗り越えての日々を振り返りつつも、その後の仕事への原動力となった経験や今に生きる力となったことが語られた。

午後は、1047 件のケース分析を監修した大橋謙策氏による講演で、厚く、熱い内容の冊子に編集された『東日本大震災被災者への 10 年間のソーシャルワーク支援』の詳細と発行の意義について話された。氏とはかつて、被災半年後の女川で一緒に社協や福祉・保健関係者を訪ね話し合ったりもした。

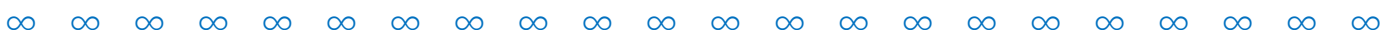
その後のワールドカフェでは、地元の行政や社協職員、住民や懐かしい支援仲間、寒風の中、一緒に仮設団地を歩いた津波で倒壊した市立病院の看護師、開業医や協会理事などと、同窓会のように感じた交流のセッションもあり、懐かしいふるさととなった石巻にまた来ようという思いを強くした時間であった。

列席した市長から、石巻市は能登の輪島市や珠洲市にトイレやブルーシート、製紙工場からの紙類などを車に積み、経験に基づいた物資や給水車、現場ですぐ動ける職員などを即、派遣したと報告があった。被害への対処は、外からの支援を強く必要としていることが知らされ、フォーラムに参加した誰もが「あの時」の石巻を思い出し胸が騒いだ。

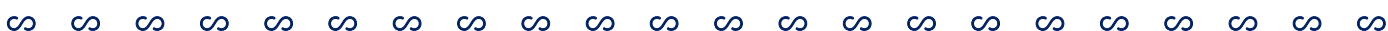
一区切りと思っていた石巻行きであったが、交流セッションでは当時のことを語るうちに涙する参加者もあ

り、終わることのない災害の爪痕、心の傷の修復を改めて感じた。

13年前厳寒の石巻に「雪道は任せて！」と頼もしい石川県協会の会員が複数駆け付けてくれたことや、全盲の夫を背負って津波から逃げたという高齢の妻を MSW がバトンをつないで仮設住宅に落ち着いたことを再訪して安堵していた金沢の MSW が、先日ニュースでインタビューを受けていたと日本協会職員から聞いた。あの時の仲間が、今困っていると思うと、ただ温かいところで、テレビを見て嘆くだけでは済まされないと強く思った。躊躇していた能登地震への派遣ボランティア登録も、出来るところまででも、という思いに押され、帰京後すぐに行ない、2月に能登に赴いた。



6. 災害支援チームからのお知らせ



【1. 書籍販売】

- 『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ』
- 『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ』
- 『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ』
- 『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅣ』

の販売を行っています！



発災から2011年9月30日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトンⅠ』に、2011年10月から2012年12月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、現地SWとの協働の記録を『バトンⅡ』に、2013年1月から2014年3月までの災害支援チーム、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、虐待防止センターでの支援・石巻市社会福祉協議会での支援、現地SWとの協働の記録を『バトンⅢ』にまとめました。そして2017年5月、2014年4月から2016年3月までの災害支援チーム、石巻市での復興公営住宅への入居支援・仮設住宅被災者自立生活支援・グループワーク支援・市民活動支援の記録を『バトンⅣ』にまとめました。

尚、売り上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせていただきます。

※ご注文は注文用紙で承ります。(注文用紙はホームページからダウンロードできます)

お知らせ欄から注文用紙表示

https://www.jaswhs.or.jp/about/publish_index.php

注文用紙表示

https://www.jaswhs.or.jp/news/news_detail.php?@DB_ID@=1393

∞ ∞

◇ 編集後記

∞ ∞

石巻災害支援チーム 事務担当 金子 小夜子

∞ ∞

13年間にわたり発行されてきました「災害支援ニュース」も今号が最終版になります。始まりは2011年3月被災後に現地入りした当協会理事やボランティアの発行です。その後担当は、「群馬県医療ソーシャルワーカー協会」から「徳島県医療ソーシャルワーカー協会」へ、そして当協会事務局へとバトンが渡され今日まで続いてきました。その時々送られてくる記事を編集し災害支援ニュースに掲載して発行してきました。

13年間の発行回数：167回
2011年3月23日（第1巻）から2024年3月31日（第13巻）まで。
167回目の最終号は2023年度第13巻（第4号）です。

ご協力いただいたボランティアのみなさま、群馬県医療ソーシャルワーカー協会と徳島県医療ソーシャルワーカー協会のみなさま、そして協会職員として現地で活動してきたみなさまに感謝いたします。長い間ありがとうございました。

∞ ∞